

大正時代について

—比較文化学的考察—

藤 田 昌 志

关于大正时代

—基于比较文化学视点的考察—

FUJITA Masashi

【摘要】

1927 年金子筑水从思想论角度出发，指出明治时代的特点为自然、实际、实证与经验性客观主义，而大正时代的特点为理想、人性、文化、主观、个人、自我与普遍性逻辑主义，并从两者相对立的视点考察和论证了明治时代与大正时代。大正时代具有 4 个特点，1. “世界中的日本” 意识逐渐浓厚，2. 日本逐渐成为拥有殖民地的帝国，3. 现代主义全面开花，4. 综合性。本研究从比较文化论角度出发，试将文化比较作为一个学问体系来考察大正时代。

キーワード：大正時代 個人 国家 内的世界 外的世界

一 序

大正時代は言うまでもなく明治と昭和の間に挟まれた時代である。大正期が終わった 1927 年の時点から振り返り、思想的に包括して、自然、実際、実証、経験的客観主義の明治期と理想、人間、文化、主観、個人、自我、普遍的論理主義の大正期という対立で明治期と大正期を論じたのは、金子筑水であった⁽¹⁾。自らを^{エンピリシスト}経験論者と言った石橋湛山は、「文明史上の原則」は「文明は客観に始まって主観に入る」⁽²⁾ ことであると述べ、明治文芸の変遷を政治文学→写実小説、人情小説→観念小説、心理小説、宗教小説→自然主義と論じ、自然主義文学の歴史的意義を高く評価した。もっとも湛山は自然主義文士がモットーとする「自己観照」は徹底性に欠けると批判し、原始的欲望以外の社会的、国家的、経済的要素についての「自己観照」を「強く深く徹底せしむることである」⁽³⁾ と結論している。

1910 年（明治43）6 月の大逆事件後、石川啄木は「時代閉塞の現状」を執筆し、「時代閉塞

の現状」が大逆事件を生んだのであり、その究極の責任者は「強権」であると国家の強権を鋭く批判した⁽⁴⁾。

大正時代は①「世界の中での日本」という問題意識が色濃く出てきた時代であるとともに②日本が植民地を持つ帝国になっていく時代であり③モダニズムが全面的に展開していく時代④複合性を有する時代——である⁽⁵⁾と考えられる。個人と国家、個人の内的世界と外的世界などをどのように考えるかが問題となる時代とも言えよう。その大正期、大正時代を比較文化学的に、文化（＝傾向）の比較を「学」としての体系を意識しながら考察するのが本稿の目的である。以上、序とする。以下、各論に移る。

二 大正時代について

1912年7月30日、明治天皇が死去し、皇太子嘉仁親王が天皇に踐祚^{せんそ}して、周易臨卦・彖傳の「大亨以正、天之道也」（大いにたてまつるに正を以てす、天の道なり）を出典とする「大正」と改元される。9月13日、明治天皇の大喪（葬儀）が行われたが、同日、乃木希典夫妻が殉死し、その是非について世論が沸騰して、『中央公論』は殉死論を特集した⁽⁶⁾。12月5日に第二次西園寺内閣が二個師団増設問題により倒れると、12月21日、第三次桂内閣が成立する。しかし、第三次桂内閣に対して人々は反発する。二個師団増設を強引に要求し西園寺内閣を倒したのが、陸軍と長州閥とみてとったのである⁽⁷⁾。政党とともに新聞記者などのジャーナリズムが「閥族打破・憲政擁護」のスローガンの下に藩閥批判を展開し、第一次護憲運動と呼ばれる反桂太郎内閣の運動が日本各地で展開されていく⁽⁸⁾。

日清・日露戦争に勝利して「一等国」民となった人々が「一等国」民に相応しい政治的権利の獲得を要求したのが第一次護憲運動であった。彼らの合言葉は「護憲」で、それは憲法政治（憲政）を護ることを意味していた。当時の論調には、国民の「公議与論」に添う政治こそ憲法の精神であるという考えがあり、「公議与論」（元来、幕末期の思想）とは政治に意見のある有志者が集まり議論を尽していけば、よりよい政治が行われるはずであるという考えであった。それが大日本帝国憲法の議会設置の条文に結実していったと考えられていて、憲政（＝憲法に則って行われる政治）こそが「公議与論」を保障するものであるが、やがて「公議与論」という言葉は「憲政」という言葉に取って替わられていった。その実体化こそ「憲政有終の美」を飾るはずであったが、軍部による倒閣を目のあたりにして、人々は「護憲」の合言葉（スローガン）のもと、力強い後押しをして「憲政」＝「公議与論」を実現しようとしたのであった⁽⁹⁾。

1913年（大正2）2月5日、数万の民衆が国会議事堂をとりまき、2月11日、桂内閣は総辞職する（大正政変）。同年10月、袁世凱が中華民国大統領に就任する。桂太郎は同月、失意のうちに死亡する。桂太郎の後続内閣は薩摩派海軍大将、山本権兵衛が受け継いだ、日本の海

軍士官がシーメンス社等の賄賂を受け取っていたことが明るみに出て（シーメンス事件、1914年（大正3）1月）、総辞職する。

1914年（大正3）6月サラエボ事件が起こり第一次世界大戦が始まる。8月4日、イギリスがドイツに宣戦布告したために、日英同盟を結んでいた日本にも関わりがあるものとなった。8日、元老と大臣は協議して日本の全面的参戦を決定し、元老、井上馨は「大正新時代の天佑」と喜んだ。山本内閣を継いだ大隈内閣は参戦を通じて、山東半島のドイツ利権の獲得を手がかりに、大陸への侵略を強化することを狙った⁽¹⁰⁾。日本軍は9月2日に山東半島に上陸し、10月14日、赤道以北のドイツ領南洋諸島を占領、11月7日に青島を陥落させた。青島陥落に際して、日本国内では提灯行列が行われた。石橋湛山は11月15日「青島は断じて領有すべからず」を書き、「大日本主義」を批判している。「世界の中での日本」という問題意識を色濃く持った大正時代の日本は、「内には立憲主義、外には帝国主義」を方針として、外には、帝国主義の植民地争奪競争に参入していったのである。キリスト教者内村鑑三は愛娘ルツの夭折、キリスト教国同士の争いである第一次世界大戦の勃発、アメリカのそれへの参戦（1917年4月）によってキリスト再臨論者となる。

その年の12月3日、加藤高明外相は日置益特命全権公使に対華二十一カ条要求を訓令し、翌1915年1月18日、日置益は五号二十一カ条の要求を直接、袁世凱大統領に手渡した。5月9日を期限とする最後通牒を突きつける日本の交渉態度は一方的、強圧的であった。日本が最初、秘密にし、憤った中国が列強に暴露した第五条七カ条は、中国の中央政府に政治・財政及び軍事顧問として有力日本人を雇うことや必要な地方の警察官庁に多数の日本人を雇うこと、及び日本から一定数量以上の兵器を供給し、日中合弁の兵器工場を設立すること等⁽¹¹⁾を内容とするものであった。その年の12月から大戦景気が始まり、成金が登場し、1920年（大正9）4月、戦後不況に見舞われるまで成金の宴は存続する。

1916年（大正5）1月、吉野作造は『中央公論』に論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表し、天皇制下の民主主義＝民本主義を説いた。「主権」が天皇にあることを前提として、「人民の為め」の政治、「人民の意嚮」を重視する政治として、民本主義を提唱した⁽¹²⁾ものであった。同年9月には河上肇の『貧乏物語』の連載が開始し（～12月『大阪朝日新聞』、翌1917年（大正6）出版されベストセラーとなる。）、重要な事業を「官業」とし国家経営とする「改造」の実践による「貧乏退治の目的」を達することを主張した⁽¹³⁾。

1917年（大正6）11月、ロシアの10月革命が起こる。1918年（大正7）、シベリア出兵をみこした軍用米の買い占めが米価を一段とつりあげ⁽¹⁴⁾、8月2日政府がシベリア出兵を宣言して、日本軍12000人が派遣されると、米騒動が富山県から起こり、たちまち全国に波及した。11月、第一次世界大戦が終結する。1919年（大正8）1月から6月まで第一次世界大戦の講和

会議＝パリ講和会議が開催される。その途中、3月1日には朝鮮で三・一運動が始まり、5月4日には中国山東省の旧ドイツ権益を日本が無条件に譲り受けることへの反対運動（＝五・四運動）のデモが北京で学生3000人余によって行われた。

1920年（大正9）5月、最初のメーデーが行われ、11月、日本社会主義同盟が結成され、12月にその発起人会が創立大会とした瞬間に解散させられ、のち結社禁止とされた。社会主義への弾圧は依然、継続していたが、人々は社会主義への理論以上に、その反抗的で反権力的な雰囲気⁽¹⁵⁾に共感していた節がある。

1921年（大正10）原敬首相が暗殺される。1920年前後から4つの社会改造の潮流が見られる。以下の4つである。①民本主義者の議論の継続と進展②社会主義運動の復権③日本や天皇を前面に出し、「国体」に立脚した改造を目指す国家主義団体の結成④国家や市町村のあらたな方策による社会の編成の試み⁽¹⁶⁾である。

1921年11月から1922年（大正11）2月にかけて、ワシントン会議が開催され、日、米、英の勢力関係は一時的に均衡をもたらし、緊張は部分的に緩和された（ワシントン体制）⁽¹⁷⁾。日英同盟、石井・ランシング協定は破棄された。

1923年（大正12）5月北一輝が『日本改造法案大綱』を出版する。9月1日午前11時58分マグニチュード7.9の関東大震災が起こる。死者91000人余、焼失家屋46万。1924年（大正13）第二次護憲運動。同年11月、吉野作造らが「明治文化研究会」設立。1925年（大正14）4月治安維持法公布、5月普通選挙法公布。

1926年（大正15）12月25日大正天皇死去。「昭和」と改元。改造社『現代日本文学全集』刊行開始（円本）。以上、大正時代を通観したところによると、民衆化、大衆化の流れは大きな趨勢として存在するようである。

三 大正時代の比較文化学的考察

三-0 大正時代の比較文化学的考察について

三. 大正時代の比較文化学的考察では、三-0 で全体的構成について述べ、三-1 吉野作造の比較文化学的考察、三-2 内村鑑三の比較文化学的考察、三-3 石橋湛山の比較文化学的考察、三-4 その他——の順で考察を進める。個人と国家（天皇）、個人の内的世界と外的世界等をどのように当時の代表的知識人である吉野作造、内村鑑三、石橋湛山等が考えたかについて考察し比較することによって大正という時代について新たな考察を加えたいと思う。三-4. その他ではそれ以外の大正のモダニズムや大衆文化について比較文化学的視点で考察してみたい。空間的には日本と中国、朝鮮という東アジアを視野に入れた比較文化学的考察を^{もくろみ}目論でいることを付言しておきたい。以下、各論に移る。

三ー1 吉野作造の比較文化学的考察

吉野作造（1878 年（明治 11）－1933 年（昭和 8））は高等小学校、中学校を首席で卒業し、第二高等学校法科を二番で卒業、1904 年（明治 33）東京帝国大学法科大学政治学科を首席で卒業したのち、東京帝国大学教授、朝日新聞編集顧問兼論説委員となったエリート中のエリートインテリである。吉野の経歴で面白いのは 1906 年（明治 39）1 月から 1909 年（明治 42）1 月までの 3 年間、袁世凱の長子袁克定の家庭教師として中国に滞在していることである。その後、（当時の大学教授になる者の常識であろう）3 年間、欧州に留学している。

吉野作造の民本主義は吉野の人生観に由来するものと言ってもよく、吉野の対立、闘争を好まない性質の所産である。彼は理想と現実との折り合いをつけようとする。1904 年（明治 37）の「ヘーゲルの法哲学の基礎」では「宇宙は具現せるロゴスなり」とし、ロゴス（道理、合理）の暫時的発現としての宇宙、ロゴスの発展としての精神界と物質界を主張するヘーゲルの説⁽¹⁸⁾を紹介している。吉野にとって宇宙、現実を「合理」とするヘーゲルの説は現実を理想実現の過程と考える確信を吉野に付与した。また、国家を固有の目的を持つ有機体とみなし（有機体的国家観）⁽¹⁹⁾、国家の目的を「個人の本性にして宇宙の本体たる大我の自由意志」⁽²⁰⁾の完成にあるとし、小我（偶然的自我）ではなく大我（合理的または理性的自我）を発揮することが「自由」（＝「自我が自我たるを得たるの謂に外ならず。」）であるとするヘーゲルの説は、個人の目的と国家の目的を合致させることによって吉野に強く訴えるものがあつたことであろう。吉野は「吾人は須^{すべ}らく有限以外の無限を有限の中に求めざるべからず。差別現象界に於いて絶対的本体を認識せざるべからず。俗塵の裡に在りて神と接せざるべからざるなり。」⁽²¹⁾と述べ、「真理や神の存在を現実の歴史や政治の中に見出し、その真理に沿うように政治や社会を導くこと」⁽²²⁾をクリスチャンとして、また政治学者としての使命とすることを表明している。こうした神認識は海老名弾正の自由主義的神学思想に通じるものであり、海老名の吉野への影響が感じられる。

吉野は当時の外的世界をどう見ていたか。吉野は中国の革命党の動きを目の当たりにし、また中国人や朝鮮人との接触を通してその認識を新たにしていき、1911 年（明治 44）留学していたウィーンでは労働党の示威運動を見て、整然としたデモの姿に感服している⁽²³⁾。吉野は世界の潮流、世界の「普遍性」としての民衆化の潮流の中でデモクラシーを日本で提唱することを目論み、日本に適合するように「民本主義」と名付けたのであつた。

吉野は 1924 年（大正 13）11 月、明治文化研究会を設立し、明治文化研究を行うが、その研究業績は、①明治文化の形成に及ぼした西洋文化の影響②明治憲法制定史③自由民権運動史の三つに大別できる⁽²⁴⁾。③については、吉野は自由民権運動は「時勢の必要」に先駆けたものであり、大正デモクラシー運動は「時勢の必要」に促されて起こつたものであるとしている⁽²⁵⁾。

吉野は国家と宗教、更に天皇についてはどのような考えを持っていたのであろうか。1919 年（大正 8）9 月発表の「国家と教会」では新約の時には旧約の時代と異なり、「^{さき}曩の命令者は今や父として、之を愛慕するといふことに変わった。これが実に又我々の国家生活の理想を示すものではあるまいか。」と述べるとともに「帝国の永遠の理想」としては「強制組織が無くなつても、即ち命令服従の関係が無くなつても、日本といふ国が立ち行くといふことに置かなければならない。」「これが無くても済むやうに国民を導くが為め命令、強制が必要だといふ見地は、何処までも取つて行きたい」⁽²⁶⁾ としている。必要悪としての法、国家という視点を持ち、無政府状態への漸進的歩みを肯定している。天皇についても究極は「命令の君が一転して愛慕の君となる」とし、「我々の宗教生活は、ある意味に於ては我々の国家生活の理想の暗示であらねばならない。」⁽²⁷⁾ としているから、吉野は宗教の理想から日本国家の理想を類推したと言つてよい。

1906 年（明治 39）9 月発表の「支那人の形式主義」では中国人の言動の基礎は何もかも「形式」で、独立自由の思弁がない、中国に主義、理想なしと述べていた⁽²⁸⁾ 吉野も 1916 年（大正 5）には対中観ががらりと変わり、同年 1 月の「支那の革命運動に就いて」⁽²⁹⁾ では、中国の革命運動について「革命運動の全体を通じて流るゝ唯一の永久的生命ある思想は、即ち弊政改革新支那建設の理想である」と述べている。

1923 年（大正 12）6 月には有島武郎が^{たけお}心中自殺するが、同年 9 月 1 日関東大震災が起こると、吉野は 11 月『中央公論』に「朝鮮人虐殺事件に就いて」を掲載して、「鮮人暴行の流言が伝つて、国民が直にこれを信じたに就いては、朝鮮統治の失敗、之に伴ふ鮮人の不満と云ふやうなことが一種の潜在的確信となつて、国民心裡の^{どこ}何所かに地歩を占めて居つたのではなからうか。」⁽³⁰⁾ と記している。「潜在的確信」とは被害者の報復に対する、加害者の潜在的恐怖心のことであろう。

三-2 内村鑑三の比較文化学的考察

内村鑑三（1861 年（文久元）－1930 年（昭和 5））は石橋湛山同様、小日本主義の系譜に属する。（他には幸徳秋水などの社会主義者が小日本主義の系譜に属する。）内村の父、宜之は高崎藩きっての儒者であつた。儒教的エトスの中で育つた内村は、16 歳の札幌農学校入学以来、儒教的エトスを離れ、西洋思想、^{なかんづく}就中、キリスト教を心の中心としたがやがて儒教は内村の中で意識的に復活され、1894 年（明治 27）11 月の『代表的日本人』（英文著作）として著される。アマスト大学留学中にキリスト贖罪の信仰（回心）を得た内村は、1903 年（明治 36）頃よりは戦争絶対反対論の立場を表明し、1912 年（明治 45）1 月長女ルツの夭折と 1914 年（大正 3）のキリスト教国同士が争う第一次世界大戦の勃発、更には希望を託していたアメリカの

参戦によって現実世界に絶望するとともに終末論を導き出し、1918 年（大正 7）から翌年にかけてキリスト再臨の宣教＝キリスト再臨運動を展開した。

「イエスと日本、私の信仰は一つの中心を有つ円ではない。それは二つの中心を持つ楕円である」⁽³¹⁾ とは内村の信仰＝内村の「二つの J」（Jesus と Japan）を表す言辞である。内村は個人として自分の属する国家である日本（Japan）を愛し信ずるが、それはキリスト教の隣人愛の顕現である。もっとも日本と等価のキリスト（Jesus）も愛し、信じる。この「二つの J」はどちらも捨てることができない存在であるから理念的に自らの信仰を二つの中心（Jesus と Japan）を持つ楕円であると言うのである。

もっとも、では現実には日本という国家とキリスト、キリスト教のどちらを取るのかと迫られたら、内村はどう対処したのであろうか。1891 年（明治 24）1 月 9 日、第一高等中学校で教育勅語奉読式が行われた際の「不敬事件」はその「踏絵」とも言える象徴的事件であった。内村は天皇親署の教育勅語に低頭することはしたのだが、「その下げ方があいまいなため、「不敬」として学校内外から集中非難を浴びることになった」⁽³²⁾。1890 年（明治 23）10 月 30 日の「教育に関する勅語」（＝教育勅語）は国家主義＝天皇崇拜主義確立のために発布されたものであった。当時のプロシア式国家主義思想の具体化の流れの中で、森有礼文部大臣によって諸学校令が制定され、学校、試験が制度化され、そして同時に官吏任用制度が整備された。

教育勅語もその流れの中で発布されたものであった。内村の低頭があいまいであったのは、「低頭」を天皇への（慣習的、儀礼的）「尊敬」による低頭ととらえる内村と厳格に、キリスト者としてありえない宗教的、礼拝的低頭ととらえる内村が存在し、そのことによる「躊躇」^{ちゅうちよ}が低頭をあいまいにしたのであった。内村の考える「日本」には「現実の日本」と「理想の日本」があり、後者は西洋と東洋の「媒酌人」となる日本⁽³³⁾であった。内村という個人はたかだか 400 年の歴史しかない「国民国家」よりはるかに崇高な理想としての「人類」を見つめていた。

内村の個人の内的世界と外的世界はどのように考えられていたのであろうか。内村は日本の「武士」を台木（＝つぎ木の台にする木。）としたキリスト教を理想とした。1918 年（大正 7）1 月の「武士道と基督教」では日本の台木の一つである武士道の重要性について次のように述べている。「我等は人生の大抵の問題は武士道を以て解決する、正直なる事、高潔なる事、寛大なる事、約束を守る事、借金せざる事、逃げる敵を逐わざる事、人の窮地を見て喜ばざる事、是等の事に就て基督教を煩はすの必要はない、我等は祖先伝来の武士道に依り是等の問題を解決して誤らないのである、（中略）武士道を棄^{すて}、又は之を軽^{かろん}ずる者が基督の善き弟子でありやう筈が無い、神が日本人より特別に要求め給ふ者は武士の^{もと}霊魂^{たましい}にキリストを宿らせまつりし者である」⁽³⁴⁾。内村にとって「武士道」と「キリスト」教は等価のものであった。

内村は最初、日清戦争を清国から朝鮮を救う「義戦」と見て支持したが、やがて、それが「利欲」の戦いであることがわかると、支持したことを深く反省し、1903 年（明治 33）頃からは戦争絶対廃止論者となっている。その理由は人を殺すことが大罪悪であるとの理由に尽きっていた⁽³⁵⁾。

内村は関東大震災の際の朝鮮人虐殺に心を痛め、また「鮮人」という当時の差別的表現は使わず「朝鮮人」と呼んでいる⁽³⁶⁾。

内村は「日本独自の善」を世界に示し、お返しに「他国の最善なるもの」を受け取るのが日本の義務であり、それは「わが国の独立と他国との平等のみ」を求める心から生じる主張であり、「各民族の最善なるものが寄与されることによって、世界は完成するということを、われわれは信じている」⁽³⁷⁾と述べている。

吉野作造が真理や神の顕現としての現実世界の「大勢」、「普遍性」である民衆の潮流＝デモクラシー（とその日本化である民本主義）に依拠していたのに対して、内村鑑三は武士道とキリストという内心の真実に依拠していたと言いうるであろう。

三ー3 石橋湛山の比較文化学的考察

石橋湛山（1884 年（明治 17）－1973 年（昭和 48））は大日本主義を批判し、小日本主義を唱えた。石橋湛山は第一高等学校受験に二度失敗して早稲田大学高等予科の編入試験を受けて合格し、文学部哲学科を卒業した人で、吉野作造や内村鑑三のような官立大学を出たエリートではない。『東京毎日新聞』や『東洋時論』の記者を^{なりわい}生業とし、1945 年（昭和 20）敗戦後、GHQ の経費が日本の国家予算の 3 分の 1 を占めていることに抗議し、日本の負担額が 2 割削減となったこと等により、（GHQ 経費削減で）目をつけられ公職追放令により GHQ から公職を追われている。1956 年（昭和 31）12 月内閣総理大臣となるも翌年 2 月、脳梗塞のため総理大臣の職を辞した。

湛山は第一次護憲運動以降、普通選挙論を掲げるようになり、その根底には民衆主義（＝民主主義）と自由主義思想が存在した⁽³⁸⁾。

石橋湛山は個人と国家の関係をどのように考えていたのか。1912 年（明治 45）5 月発表の「国家と宗教及文芸」では「国民として生きる^{ため}為に」国家をつくるのではなく、「人類」「個人」「人間」として生きるために国家を形成し、国民として団結するのである⁽³⁹⁾と述べ、個人主義を国家主義の上に置くことを主張している。同年 10 月発表の「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」では「経験的に知らる^{イデオロ}自己は即ち欲望である。」「僕は飽までも^{エンジリス}経験論者である。」⁽⁴⁰⁾と述べている。加藤弘之は形而上学者で、存在を形而上的に解釈し、「君主」や「国家」を神格化し、個人の国家への服従を説いているが、湛山は「日々夜々国家が個人の欲望の

発現を制限しておると同時に、個人の欲望も絶えず国家を変化せしめつつあるのである」⁽⁴¹⁾と国家を絶対視せず、国家や社会は「個人の生活の必要上起こったもの」であり、「個人が欲望を満足せんが為めには孤立ではうまく行かぬ、故に共同生活の形式を採った。これが即ち国家であり、社会である」⁽⁴²⁾とするのは大学時代に強く感化された田中王堂の哲学と軌を一にする考えであった⁽⁴³⁾。

石橋湛山は経験論者、「人類」「個人」「人間」(の欲望)を「君主」や「国家」の上に置きつつ、作用的(＝相対的)に、機械的に両者の調和を目指した人である。換言すれば、大正時代、知識人の間に流布した文化主義・人格主義(文化主義・人格主義においては「文化」は「自然」と範疇的に区別され、文化価値の担い手である「人格」は、文化価値から切り離された「自然人」と対比されていたように、「価値」の世界と「事実」の世界の峻別が思考の出発点をなしていた⁽⁴⁴⁾)とは対照的に、湛山は人間が人間として生きる事実、人間が自らの欲望を実現するために生きるという「自然的な事実それ自体に人間価値の根源を見出す立場」⁽⁴⁵⁾をとった⁽⁴⁶⁾。

もっとも単なる「欲望」の実現だけではなく1915年(大正4)「先ず功利主義者たれ」⁽⁴⁷⁾で「我れの利益を根本とすれば、自然相手の利益も図らねばならぬことになる、相手の感情も尊敬しなければならぬことになる。」と述べるように自他の相互の「利」「感情」を重んじる「功利主義」思想を湛山は持っていた。

湛山の内的世界の基本には日蓮が存在する。父、杉田湛誓が日蓮宗身延山久遠寺第八十一世法主であったこともあるが、鎌倉幕府の懷柔策に対して「王地に生たれば身を随へられたてまつるやうなりとも心をば随へられたてまつるべからず」と言った日蓮について「日蓮の偉大は最もよくこの瞬間に於て発揮せられた」、「日蓮の意気」がないなら不平の声など挙げぬがよい、僅かの金や人情で節を売り、説を曲げる現代の学者、宗教家、政治家、評論家、教育家は日蓮の「心をば随へられたてまつるべからず」の一句を日に三唱するがよい、と述べている⁽⁴⁸⁾。

湛山の大正当時の外的世界に対する考えは一貫して反膨張主義、小日本主義である。1914年(大正3)の日本の対独参戦論による青島総攻撃については「青島は断じて領有すべからず」⁽⁴⁹⁾で青島領有批判を行い、1915年3月の「干渉好きな国民」⁽⁵⁰⁾では、青島、満州、旅順、「其の他一切の利権」を「還したい」と述べている。

1919年(大正8)8月「袋叩きの日本」⁽⁵¹⁾では、第一次世界大戦の結果、ドイツと日本が袋叩きにあい、日本は山東問題(青島領有問題)で全くの孤立となり、日本ほど公明性を欠いた自由、平等の精神の乏しい国はない、悪いのは元老、軍閥、官僚、財閥の特権階級であるとしている。1921年(大正10)「大日本主義の幻想」⁽⁵²⁾では経済思想面で1920年アメリカに対する商売(＝輸出入合計額)の方が朝鮮、台湾、関東州の三地を合わせた商売より5億3千余万円多いことを述べ、対外認識面では他国を侵略するか他国から侵略される恐れのない限り、軍

備を整うる必要はない、と述べ大日本主義の幻想、小日本主義の実現を説いている。1923 年（大正 12）「所謂対支二十一個条要求の歴史と将来」では二十一個条中、中国領土保全を述べる第四号以外は「悉く支那の勢力を縮め、主権を侵害するものならざるなきに見ても明かならずや」⁽⁵³⁾ と対華二十一個条を主権侵害とみなしている。

石橋湛山ほど大日本主義を一貫して批判、否定した人は大正期、昭和期を通じて稀有であると言っても過言ではない。内的世界を比較すると、吉野作造や内村鑑三が内なる神＝神性に基づいたのに対して、石橋湛山には(現実には利己、利他両方を満たす功利主義者であったが)内的世界の根底に不撓不屈の日蓮主義が存在する。

三-4 その他

三-4 その他では「大正デモクラシー期」の問題、大正モダニズム、大正の大衆文化等について述べてみたい。

「大正デモクラシー期」は日露戦争後の 1905 年頃から 1931 年（昭和 6）9 月の満州事変前後までのほぼ四半世紀や 1934 年（昭和 9）年の日本のヴェルサイユ体制からの離脱宣言前後までとするものが多い⁽⁵⁴⁾ が、時代閉塞の状況を打破するために社会運動に飛びこんだインテリの大半は、地主や裕福な家庭の子女で、彼らの考え方と複雑に屈折した労働者の意識との間には大きなズレが存在し、日本の当時の総人口の 82%（1920 年（大正 9）国勢調査の時点）を占めていた郡部の人々をとらえていたものは、国家を優位におく考え方、つまり国家主義思想であり、皇室中心主義の歴史観である⁽⁵⁵⁾ という考え方がある。吉野作造、美濃部達吉の民本主義についても天皇制と共存する思想で、20 世紀の現実を批判する鋭い思想の牙はもっておらず、彼ら 2 人はともに東京帝国大学法学部教授であり、象牙の塔の仮面の下で大日本帝国の「一流」のエリート官僚を系統的に養成した責任は決して軽くない（なぜなら東京帝大法学部卒のエリート官僚は、「優秀」であればあるほど、中国や満州の侵略のおさき棒をかつぐことになった。）⁽⁵⁶⁾ という考え方もある。そうした点に鑑みて大正デモクラシー期という時期区分を廃止する考えも出てくる。大正時代の代わりに「1910 年代－1930 年代」という時期区分を提案する識者もいる⁽⁵⁷⁾。米騒動（1918 年（大正 7））を境にして大正デモクラシーを前後に分け、民本主義（吉野作造）と大陸への進出が矛盾せず共存していた前半期の「帝国のデモクラシー」に対し、後半期には多様な「改造」の潮流－民衆運動は民本主義と社会主義、国家主義の三つに分かれ互いに拮抗しながら日本全体の「改造」へ向かったとする見方⁽⁵⁸⁾ もある。

大正モダニズムについては、都市では電気・ガス・電話・道路・上下水道・学校・公園などのインフラ整備が急速に進み、私鉄が郊外に延び住宅地が造成され、衣服では洋服が流行し、食ではパン食が始まり、カレーライス・コロッケ・トンカツという大正の三大洋食が広まった。

文化の担い手は主として俸給生活者（サラリーマンであり都市中間層）で、東京的な都市文化に対して農村も独自の文化を建設しようとして青年団や産業組合、雑誌『家の光』などがその先頭に立った。しかし、結局、都市や農村の貧しい特定部分同士が大連合し既成体制の打破に向かうことはなく、彼らの多くは都市文化を享受する都市中間層を一つの手頃な目標として、個別的に私的領域での生活改善に努めたり、政治による均霑を求めていった⁽⁵⁹⁾。

大正の大衆文化の特徴はアメリカの大衆文化と家や国家に対するコンフォーミティー（一致、順応）を基調とする伝統社会のモラルとの^{つぎき}接木にある⁽⁶⁰⁾とする考えがある。これに対して、大正文化において、インテリを対象とした白樺派、大正教養主義の特徴は、ヨーロッパ文化と家に象徴される家父長制への反逆が結びついたところにあると言う。彼らが主としてとりいれた西欧文化はフローベール、モーパッサン、イプセン、トルストイ、印象派などの芸術に代表される 19 世紀ロマン主義、リベラリズム、ヒューマニズムの文化傾向であった。白樺派・大正教養主義の文学者、芸術家にとって、家へのコンフォーミティーを基調とする大衆文化は、全く相容れないものであり、彼らはアメリカ文化も軽蔑した。もともと大衆文化も白樺派、大正教養主義も欧米文化の受容を第一と考える点では共通しており、このことは逆に言えば、両者が朝鮮、中国など東洋の文化を鑑賞の対象としてみたとしても、受容すべき対象としては考えていなかったことを意味している⁽⁶¹⁾。

白や線の美しさを朝鮮美術の中に発見した柳宗悦^{むねよし}や朝鮮文化を鑑賞する大正当時の日本人の心の中には、植民地本国、日本の人間として植民地の人々を悲哀な運命の中にあると独断する心が働いていたことを金雨基は批判したが、それは日本文化の脱アジア的性格を示す一つの実例である⁽⁶²⁾と識者は言う。

白樺派、大正教養主義が国民大衆に対する影響力という点では、とても大衆文化には比肩できないと考え、また大衆文化の基調が家父長制に対するコンフォーミティーにあったことに注目し、伝統的社会のモラルと結びついた大衆文化が、広く国民大衆をとらえていたということは、実は昭和時代に国民大衆が天皇制の神話体系に収斂^{れん}されていく土壌であったとする点が大正文化を考える視点の基本である⁽⁶³⁾とする識者の言辭は正鵠を射たもののように思われる。ここには大正が「昭和」を用意した、準備した時代であることの一つの理由が明かされている。

四 結語

大正時代とは一体、どのような時代であったのか。本稿の比較文化学的考察によって、単なる「大正デモクラシー」の時代で片づけることのできる時代ではないことが明らかになった。民衆化、大衆化の時代であることに異論はないが、「国家」との関係で大衆文化を考えると、当時の 82%の人々は伝統的社会のモラル＝国家主義思想、皇室中心主義の歴史観によってと

らえられていた。

また、大正の大衆文化は、ヨーロッパ文化と家に象徴される家父長制への反逆が結びついた白樺派、大正教養主義とは異なり、アメリカの大衆文化と家や国家に対するコンフォーミティー（一致、順応）を基調とする伝統社会のモラルとの接木であったとする識者の言辞もある（既述）。吉野作造は日本に適合させた民本主義を提唱し、内村鑑三は武士道とキリスト教を等価の「二つの中心」と考えた。石橋湛山は小日本主義を主張し抜いた。その大正時代の根底には、圧倒的多数の大衆文化を担う国民大衆が存在し、天皇制の神話体系に収斂していく土壌として昭和を用意し、準備したのであった。大衆文化、大衆社会は（長期の）経済的停滞の中では暴走し、侵略主義に走ることを我々は歴史を学ぶことによって知っている。100年前の轍を踏むことのないよう比較文化学的に歴史に学びたい。

〔注〕

- (1) 大橋容一郎（2008）日本哲学史フォーラム編（2008）所収 p.21
- (2) 石橋湛山 1912 年（明治 45）a 石橋湛山（昭和 46）a 所収 p.33
- (3) 石橋湛山 1912 年（明治 45）b 石橋湛山（昭和 46）a 所収 pp.68-71
- (4) 石川啄木（1910（明治 43））石川啄木（1980）pp.268-271
- (5) 毎日新聞社編（1980）pp.140-141 成田龍一氏の言辞
- (6) 川崎庸之等総監修（1990）p.912
- (7) 成田龍一（2007）p.21
- (8) 成田龍一（2007）p.21
- (9) 季武嘉也（2004）季武嘉也編（2004）pp.25-26
- (10) 成田龍一（2007）p.57
- (11) 伊藤（2010）p.70
- (12) 成田龍一（2007）p.28
- (13) 成田龍一（2007）pp.64-65
- (14) 竹村（2004）p.87
- (15) 成田龍一（2007）p.113
- (16) 成田龍一（2007）p.104
- (17) 成田龍一（2007）p.158
- (18) 吉野作造（1905.1）「ヘーゲルの法哲学の基礎」吉野作造（1995）『吉野作造選集』1 所収 pp.32-34
- (19) 吉野作造（1995）『選集』1 p.76
- (20) 吉野作造（1995）『選集』1 p.75

- (21) 吉野作造 (1995)『選集』1 p.31
- (22) 田澤晴子 (2006) p.60
- (23) 吉野作造 (1928)「民本主義鼓吹時代の回顧」吉野作造 (1995)『選集』12 p.84
- (24) 三谷 (S.47)「思想家としての吉野作造」責任編集三谷編 (S.47) p.52
- (25) 三谷 (S.47)「思想家としての吉野作造」責任編集三谷編 (S.47) p.47
- (26) 吉野作造 (1995)『選集』1 p.185
- (27) 吉野作造 (1995)『選集』1 p.186
- (28) 吉野作造 (1996)『選集』8 pp.174-187
- (29) 吉野作造 (1996)『選集』8 pp.243-258
- (30) 吉野作造 (1995)『選集』9 p.203
- (31) 内村鑑三 (1953) p.171
- (32) 鈴木範久 (2012) p.96
- (33) 内村鑑三 (1892 (明治 25))「日本国の天職」内村鑑三 (1981)『全集』1 pp.290-291
- (34) 内村鑑三 (1982)『全集』24 p.8
- (35) 鈴木範久 (2012) p.164
- (36) 鈴木範久 (2012) pp.214-215
- (37) 内村鑑三 (1983)『全集』29 p.421 ^{しぶや}澁谷浩 (1988) p.185 の訳による。
- (38) 増田弘 (1995) p.53
- (39) 石橋湛山 (明治 45)「国家と宗教及文芸」石橋湛山 (昭和 46)『石橋湛山全集』(=『全集』) 第一巻 p.73
- (40) 石橋湛山 (大正元)「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」石橋湛山 (昭和 46)『全集』第一巻 p.116
- (41) 石橋湛山 (大正元)「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」石橋湛山 (昭和 46)『全集』第一巻 p.128
- (42) 石橋湛山 (大正元)「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」石橋湛山 (昭和 46)『全集』第一巻 p.127
- (43) 藤田昌志 (2014)「石橋湛山の日本論—明治・大正期を中心として—」日本比較文化学会 (2014)『比較文化研究』No.111 pp.75-76
- (44) 松本三之介 (2011) p.212
- (45) 松本三之介 (2011) p.212
- (46) 藤田昌志 (2014) p.76
- (47) 石橋湛山 (昭和 46)『全集』第一巻 pp.404-407

- (48) 石橋湛山 1911 年 (明治 44) 9 月号『東洋時論』「食堂会議」「宮内官と地方管理」石橋湛山 (昭和 46) 『全集』第一巻 p.185
- (49) 石橋湛山 (昭和 46) 『全集』第一巻 p.377
- (50) 石橋湛山 (昭和 46) 『全集』第二巻 p.328
- (51) 石橋湛山 (昭和 46) 『全集』第三巻 pp.88-89
- (52) 石橋湛山 1921 年 (大正 10) 「大日本主義の幻想」(昭和 46) 『全集』第四巻 pp.16-26
- (53) 石橋湛山 1923 年 (大正 12) 「所謂対華二十一個条要求の歴史と将来」石橋湛山 (昭和 46) 『全集』第四巻 p.139
- (54) 前者は成田龍一 (2007) はじめに v、後者は竹村民郎 (2004) p.169。
- (55) 竹村民郎 (2004) p.169
- (56) 竹村民郎 (2004) pp.169-170
- (57) 竹村民郎 (2004) p.171
- (58) 毎日新聞社編 (2012) p.27
- (59) 季武嘉也 (2004) 「大正社会と改造の潮流」季武嘉也編 (2004) pp.88-92
- (60) 竹村民郎 (2004) p.126
- (61) 竹村民郎 (2004) pp.126-127
- (62) 竹村民郎 (2004) p.127
- (63) 竹村民郎 (2004) p.128

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 大橋容一郎 (2008) 大正期におけるカント研究の動向」日本哲学史フォーラム編 (2008) 所収
- (2) 日本哲学史フォーラム(代表藤田正勝)編 (2008) 『日本の哲学』第 9 号 特集 大正の哲学 昭和堂
- (3) 石橋湛山 1912 年 (明治 45) a 「明治時代の文芸に現れた思想の潮流」石橋湛山 (昭和 46) a 所収
- (4) 石橋湛山 (昭和 46) 『石橋湛山全集』第 1 巻 a 東洋経済新報社
- (5) 石橋湛山 1912 年 (明治 45) 「自己観照の足らざる文芸」石橋湛山 (昭和 46) a 所収
- (6) 石川啄木 (1910 (明治 43)) 「時代閉塞の現状」石川啄木 (1980) 所収
- (7) 石川啄木 (1980) 『石川啄木全集』第四巻 筑摩書房
- (8) 毎日新聞社編 (2012) 『大正という時代「100 年前」に日本の今を探る』毎日新聞社
- (9) 川崎庸之等総監修 (1990) 『読める年表・日本史』自由国民社
- (10) 成田龍一 (2007) 『大正デモクラシー シリーズ日本近現代史④』岩波書店 岩波新書 (新赤版) 1045
- (11) 季武嘉也 (2004) 「大正社会と改造の潮流」季武嘉也編 (2004) 所収

- (12) 季武嘉也編 (2004)『日本の時代史 24 大正社会と改造の潮流』吉川弘文館
- (13) 伊藤之雄 (2010)『日本の歴史②政党政治と天皇』講談社 講談社学術文庫
- (14) 竹村民郎 (2004)『大正文化 帝国のユートピア 世界史の転換期と大衆消費社会の形成』三元社
- (15) 吉野作造 (1905.1)「ヘーゲルの法哲学の基礎」吉野作造 (1995)『吉野作造選集』1 所収
- (16) 吉野作造 (1995)『吉野作造選集』(=『選集』) 1 岩波書店
- (17) 田澤晴子 (2006)『ミネルヴァ日本評伝選 吉野作造 ——人世に逆境はない——』ミネルヴァ書房
- (18) 吉野作造 (1928)「民本主義鼓吹時代の回顧」吉野作造 (1995)『選集』12 所収
- (19) 吉野作造 (1995)『選集』12 岩波書店
- (20) 三谷 (S.47)「思想家としての吉野作造」責任編集三谷編 (S.47) 所収
- (21) 責任編集三谷太一郎編 (S.47 (1972))『日本の名著 48 吉野作造』中央公論社
- (22) 吉野作造 (1996)『選集』8 岩波書店
- (23) 吉野作造 (1995)『選集』9 岩波書店
- (24) 内村鑑三 (1953)『内村鑑三著作集』第7巻 岩波書店
- (25) 鈴木範久 (2012)『内村鑑三の人と思想』岩波書店
- (26) 内村鑑三 (1980-1984)『内村鑑三全集』(=『全集』) 第1巻—第40巻 岩波書店
- (27) 内村鑑三 (1892 (明治 25))「日本国の天職」内村鑑三 (1981)『全集 1』
- (28) 内村鑑三 (1982)『全集』24
- (29) 澁谷浩 (1988)『近代思想史における内村鑑三—政治・民族・無教会論—』新地書房
- (30) 増田弘 (1995)『石橋湛山』中央公論社 中公新書 1243
- (31) 石橋湛山 (明治 45)「国家と宗教及文芸」石橋湛山 (昭和 46)『石橋湛山全集』(=『全集』) 東洋経済新報社 第一巻 所収
- (32) 石橋湛山 (昭和 46)『石橋湛山全集』(=『全集』) 第一巻
- (33) 石橋湛山 (大正元)「加藤弘之博士の『自然と倫理』を評す」(昭和 46)『全集』第一巻 所収
- (34) 藤田昌志 (2014)「石橋湛山の日本論—明治・大正期を中心として—」日本比較文化学会 (2014)『比較文化研究』No.111 所収
- (35) 日本比較文化学会 (2014)『比較文化研究』No.111
- (36) 松本三之介 (2011)『近代日本の中国認識 徳川期儒学から東亜共同体論まで』以文社
- (37) 石橋湛山 1911 年 (明治 44) 9 月号『東洋時論』「食堂会議」「宮内官と地方管理」(昭和 46)『全集』第一巻所収
- (38) 石橋湛山 (昭和 46)『全集』第二巻
- (39) 石橋湛山 (昭和 46)『全集』第三巻
- (40) 1921 年 (大正 10)「大日本主義の幻想」(昭和 46)『全集』第四巻所収

(41) 石橋湛山（昭和 46）『全集』第四卷

(42) 1923年（大正12）「所謂對華二十一個條要求の歴史と将来」石橋湛山（昭和46）『全集』第四卷所収